

## 街歩きその72

# 大宰府と大宰府天満宮

## ～福岡県太宰府市～



新緑の楠に映える太宰府天満宮



太宰府天満宮では猿回しも



紫根の集散地大宰府を象徴する  
紫染めの衣 (大宰府展示館)

古寺名刹も多い大宰府  
戒壇院 (上) と観世音寺 (下)



「東風（こち）吹かば にほひをこせよ 梅の花、主（あるじ）なしとて春を忘るな」ご存知菅原道真が都での政争に敗れ、任官した大宰府より、都を思って読んだ歌とされる。満開の梅林に立つと決まって頭に浮かぶ歌だ。今春は冬の厳しい寒さの所為もあってか、梅を追うように桜が開花し始め、東風吹けば、梅の花吹雪。花吹雪と云えば“桜吹雪”だが、紅白にピンクを併せた梅の花吹雪もまた格別だ。

ということで、今回は九州大宰府を取り上げた。

大宰府のある北部九州は日本中で一番中国や朝鮮に近く、原始時代から盛んな交流があり、進んだ文化はまずこの地方にはいつてきた。それゆえ、大和朝廷は早くからこの地方を治め、外国との交流をしてきた。663年、白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に負けたことをきっかけに、敵の侵攻に備えるため、水城や大野城、基肄城を築いた。その壮大な遺構が当時の朝廷の大陸からの侵攻への畏怖を表している。大陸からの脅威が薄れると、その中心地に都を模した街がつくられ、大宰府が置かれる。今は、その址を留めるばかりだ。

九州は、紫草の生産地でもあり、当時もっとも高貴な染料である紫草の根“紫根”は、大宰府に集められ、都へも送られた。大陸との交易と併せ、大宰府の反映を支えたと云われる。

今は、大宰府と云えば、菅原道真を祀った太宰府天満宮である。学問の神様として、受験前には多くの参拝者が訪れる。その壮麗な佇まいに惹かれる。本州の多くの神社が、杉や檜、あるいは椎、欅類が鎮守の森を形成しているのに対し、太宰府天満宮は楠の大木が目を惹いた。

太宰府天満宮の喧騒を離れると、近隣には由緒ある古寺も多く、それらを繋ぐひっそりとした道にも情緒が感じられる。